

## 【唐沢山城】

佐野市郷土博物館では10月5日から佐野氏と唐沢山城をテーマに企画展を予定しています。唐沢山城は関東地方を代表する山城としてお城好きには有名ですが、須永もたびたび訪れています。

須永の漢学の師である三島中洲は明治19年（1886）8月、須永らの招きに応じて佐野など栃木県方面を旅行しました。その時の紀行文『印須日録』の刊本が須永文庫にもあります。この旅で三島は、後に唐沢山神社の初代宮司となる佐野郷に勧められて唐沢山城に上りました。

唐沢山神社は佐野郷らの主唱で藤原秀郷（倭藤太）の霊廟として唐沢山城の本丸跡に創建された神社です。藤原秀郷は平安時代の武将で、平将門を討った功で下野守となりました。百足退治の伝説でも有名です。

唐沢山城は今は国指定の史跡で、文化庁「国指定文化財等データベース」によると、秀郷の末裔を名乗る佐野氏により築城され、中世城館の変遷を知る上で重要な城跡だということです。

川俣久平編著『唐沢山神社創建誌』（明治45年発行、昭和30年再版）などによると、佐野郷は葛生町の素封家清水幸助の三男で、佐野家を継ぎました。同書には神社創建当時の出来事が日記体で記されています。これを読むと、創建の中核となった東明会の総裁に政府高官の佐野常民が就任して強力に支援したこと、

三条実美太政大臣ら政治家や皇太子時代の明治天皇ら皇室関係者がたびたび訪れていたことが分かります。名産の松茸狩りがしばしば行われたり、松茸が贈呈用に使われたりしたことも書かれています。

大高八三郎「明治に甦った藤原秀郷―「唐沢山神社創建誌」から―」（史談会報第5号、1989）、同「明治に甦った藤原秀郷 『唐沢山神社創建誌』から―統一」（史談会報第6号、1990）はこの当時の事情を分かりやすくまとめています。

『創建誌』によると明治18年8月15日には須永の漢詩の師である岡本黄石と歴史家の重野安繹が訪れました。

### 【一望先知眼界寛】

この前後の時期の作品でしょうか、須永の漢詩集『輓斎詩稿』には「唐沢山行」と題する七言絶句2首が載っています。

活字になっていないと思われるので、ここで紹介します。

満壑松声徹耳喧

千秋誰復吊英魂

残山人去尋無処

只見当年古壘存

一望先知眼界寛

晃山遥接越州山

鼓巖秋老松杉冷

想見天兵在此間

二首目にあるように城跡からの眺望は素晴らしく、140年近く経った現代でも条件が良ければ東京スカイツリーも見えるそうです。

### 【佐野八景】

『輓斎詩稿』には、「佐野八景」と題する七言絶句八首もあります。

八景とは中国の瀟湘八景に由来する山水画の画題ですが、朝鮮半島や台湾、日本など東アジア各地で独自の八景が選ばれています。日本では近江八景、金沢八景などが特に有名です。

須永は以下の八景を挙げました。

唐沢晴嵐

三轟夕照

磯山秋月

出流山晩鐘

安蘇沼落雁

越名帰帆

船橋夜雨

蓬萊暮雪

「唐沢晴嵐」の「晴嵐」とは、『全訳 漢辞海 第四版』（三省堂）によると、「晴れた日の山のもや」をいうようです。

須永はこう詠んでいます。

四野雲晴日色紅

颯然吹起万松風

山頭只在城壘跡

人説藤公亡逆功

### 【南摩綱紀】

明治21年4月20日の『須永元日記』によると、漢学者の南摩綱紀が須永に唐沢山神社への参拝に同行出来ないか問い合わせています。しかし、須永は学業を理由に断りました。

南摩は会津藩士でしたが、藤原秀郷の子孫といい、この4年前の明治17年、すでに唐沢山城を訪れていて、紀行文『追遠日録』を著しました。『唐沢山神社創建誌』にも南摩の記述があります。

### **【朴泳孝らも登城】**

明治21年8月9日の『須永元日記』によると、甲申政変の亡命者である朴泳孝、鄭蘭教が須永の弟の安三郎と唐沢山に上りました。須永自身は「余、約殿行」とあるので「後で追いつく」と約束したのでしょうか。日記には続けて「会笠間於銀行、俱上唐沢山、一酌」とあります。友人の笠間氏と銀行で会い、いっしょに唐沢山に上り一献傾けました。

### **【修正済】**

九、十回目に修正を入れました。

2024年9月20日 広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko>